

## 津野町で飲める本格派コーヒー



中土佐町大野見から津野町に抜ける山道が197号線に合流する少し手前。四万十川の源流点を見晴らせる雄大な場所で、修業を積んだ職人の点てる本格的なコーヒーを飲むことができる。「Coffee 7 Fushigi」店主の山本氏は東京で料理人として働いていたとき、コース料理の最後に最適なコーヒーを提供したいと考えるようになった。その思いは彼をコーヒー器具専門会社に転職させ、そしてコーヒーと真剣に向き合わせることになる。業界で有名な故河野敏夫氏の最後の弟子となり、焙煎担当として豆の煎り方やその具合にこだわりを持ち、師匠の愛用していた焙煎機を受け継いで今年10月に津野町でお店を開いた。



山本氏が津野町に来たのは約2年半前のこと。独立して開業したいと望んでいたところ、津野町が地域おこし協力隊を募集していることを知り四万十川源流点の町にやってきた。過去に1度訪れたことがあっただけの四万十川流域でなぜお店を開こうと思ったのかと尋ねると、“四万十川に呼ばれてやって来た”と答える山本氏。その直感は正しかったようである。たまたま知り合った大家さんが理解のある人で開店にあたって親身に協力してくれたこと。たまたま出会った地域おこし協力隊の同期の実家に、彼が勤めていた会社の年代物のサイフォンが眠っていたこと。奥様がスイーツ好きで、津野町に来てから手作りスイーツの出荷を始めたところ評判になったこと。四万十川源流点の町で四万十川の美味しい水を使って点てるコーヒーを彼自身が満足しており、自信をもって提供出来ること。

引き寄せられるようにやってきた四万十川源流点の町。彼にたくさんの巡りあわせを提供していて、必要なときに必要な支えがタイミングよくもたらされていると感じはしないだろうか。そういう意味で、山本氏は本当に四万十川に呼ばれてやって来たコーヒー職人なのである。そして、四万十川は目に見えない魅力で人を引き寄せる不思議な力を持っているということも同時に言えるのではないだろうか。

## 「Coffee 7 Fushigi」



さて、山本氏の点てる本格的なコーヒー。今回いただいたのは「温泉珈琲」という四万十川源流域の冷鉱泉を利用しているコーヒーである。本当に角の立たない丸い感じの柔らかさで、その中でもコーヒーの香りと味が主張しすぎない程度できちんと存在感を示している。これがプロの点てるコーヒーなんだと局長とうっとりしてしまった。また、美人な奥様の手作りスイーツも趣味で始めたとは思えないほど本格的で美味しく、女性にも男性にもおすすめです。

わざわざ行こうと思えるお店。自信をもって知人におすすめできるお店。四万十川源流点で本格的なコーヒーを飲めるお店。そして、それだけでなく住民たちの穏やかな笑い声が響く憩いの場。こんな素敵なお店が四万十川沿いにできたことを私はとても嬉しく思う。皆さんも是非足を運んでみてほしい。

ちなみに店名の「Coffee 7 Fushigi」は、コーヒーにはまだ不思議なことがたくさん隠されていること、店主の山本氏が不思議な性格だということから名付けられたらしい。このお店には、店主に会いに行く面白さもある。





# 農業で生きていく

山本氏と同じく津野町の地域おこし協力隊として3年前に四万十にやってきたのは西森 路晃氏。京都で生まれ育ち、事務の仕事をしてながら暮らしていた。四万十には祖母がいたそうで、小学生のころに何度か遊びに来たことがあるらしいが、四万十との縁はただそれだけ。ところが、彼も山本氏と同じように導かれるように四万十にやってくることとなった。

四万十に来るまではごく普通のサラリーマン。農業なんてしたことがなかったという。しかし、四万十に来てからの3年間で彼を大きく変えていった。もちろん農業も始めたし、山に入って木を切るようになった。鶏もさばくし、料理も始めた。梶原町で有名な棚田オーナー制度を津野町でもやってみたく、町の人と協力して津野町の棚田オーナー制度の仕組みを検討し運営し始め、棚田をキャンドルでライトアップするイベントも一緒に考えた。こうやって町の人にいろんなことを教えてもらいながら、自分のできることを一生懸命やり続けていった結果、町の人が自然と彼を支えてくれるようになった。そして、彼も町のためにと強く思うようになっていき、彼の役割が町の中にできていった。このような良いスパイラルが農業未経験者の彼に“四万十で農業をして生きていく”という決断をさせたのではないだろうか。きっとたくさんの不安があったに違いない。本当に生活していけるか、困ったとき助けてくれる人はいるか、他に選択肢はないのか。そんな彼を支えたのは、間違いなく四万十の風土と温かい町民たちなのである。



地域おこし協力隊の3年間の任期を終えた後、来年4月から西森氏は本格的に農業で生活していくことになる。3年間の経験から、1人でやっていくために栽培するのはシシトウと決めたそうだ。今は試験的に少しだけ育てているが4月からは250本のシシトウを育てて生計を立てていく。他にも自分の食べる分のお米や野菜を作り、町のためにできることを探しながら四万十で骨をうずめるつもりだと穏やかに語ってくれた。彼の今後の活躍がとても楽しみであり、四万十にとっても大変ありがたいことであると感じた。

## 地域おこし協力隊

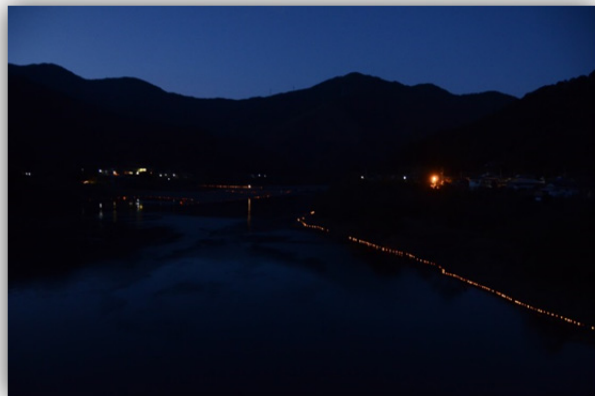
今回は津野町の地域おこし協力隊の2人を取材した。山本氏は業界でも通用する本格的なコーヒーと住民の憩いの場を四万十に提供してくれた。西森氏は四万十で農業をするということを決意し、町の人と一緒に農業に関する新しいシステムを作ってくれた。共通して言えることは、外から来た人と昔からそこに住む町民とが協力し合っていて取り組んでいるということ。外からの新しいアイディアに四万十らしさや昔ながらの知恵が加わって新しい何かが生まれているということである。

四万十の住民は昔から川と上手に向き合ってきた。そして川からの恵や被害もまた、皆で分け合って支え合ってきた。人々は自然と力を合わせることが出来るし、たくさんの知恵を持っている。津野町は、そんな四万十の風土と外から来る人たちの熱意が折り重なって動いている素晴らしい町なのだと感じた。

今回は津野町を取材したが、地域おこし協力隊は四万十の多くで採用されている。四万十のあちらこちらで何が起こっているのか、これから何が起こきようとしているのか、目を向ける価値は十分ありそうだ。



## 四万十川 竹燈り～キャンドルナイト～



12月22日(日)四万十市西土佐の口屋内で初めてのキャンドルイベントが開催されました。このイベントも地域の方や地域おこし協力隊などたくさんの人が関わって企画されています。

竹の中で柔らかに光る火が口屋内の広域を照らした幻想的なイベントでした。旧口屋内小学校ではトン汁やホットココア、熱燗ならぬ竹熱燗がふるまわれた他、ハンドベルの演奏や天体観測も行われました。

皆さんも楽しいクリスマスをお過ごしください。

